

幸せの本質を教えてくれた8歳の男の子

作家／コピーライター ひすい こたろう（日本講演新聞 2949 号）

これは僕に「幸せの本質」を教えてくれた宗一郎くんの話です。宗一郎くんは8歳の時、小児がんで亡くなった男の子です。彼のお父さんがこんな手記を書かれています。



「息子宗一郎の話をします。彼は平成10年3月31日、光の世界に帰りました。最後の3か月は病院ではなく、自宅で過ごしました。その時の私たちは必死でした。何とか病気を治して元の元気な宗一郎になってほしかったんです。いろんなことをやりました。でも、今から思えば、もっともっと一緒に楽しんであげればよかったと思います。

日に日に痩せ衰え、痛みに苦しむ息子を私たち夫婦は精一杯看病しました。

自分では歩くこともできない息子を背中におんぶして、お風呂にそのまま入った時、痛みが少し和らいだ息子の顔はとても幸せそうでした。支えている私たちも泣きながらお風呂に浸かっていました。

いてくれるだけで嬉しい。生きていてくれるだけでありがたい。

夜は私と妻の間になって眠るのですが、30分毎に訪れる痛みを和らげるために、私たちは宗一郎の体の位置を変えてさすってやりました。

正直言ってとても辛かったです。でも、いてくれるだけでいい。彼がいなくなることが怖かったんでしょね。辛い痛みの中でもできるだけ私たちに笑顔を見せようとしていた子どもでした。

『お母さんごめんね、もっと元気だったらお母さんお父さんも疲れないのにね。お母さん、僕、もっと生きたいよ』

痛みが出ると治療器で痛みを和らげてあげました。でも、もうこれはいけないと思い、病院へ連れて行く車の中で、意識が定かでない宗一郎が、こう言ったんです。

『お父さん、お母さん、信じ合って、助け合って、わかり合って生きてゆくんだよ。悲しい時や苦しい時ほど笑うんだよ。自分を責めることが一番いけないんだよ』などと強い口調で私たちに言うのです。

病院での最期の時、痰が気道を満たして声にならない声で、言った息子の最後の言葉が『ありがとう』なんです。

それまで全身の痛みで抱くことができなかったのですが、最期は母親に抱かれながら静かに息を引き取りました。」

小児病棟の子どもたちの夢って、「いつか大人になりたい」なんだそうです。昨日亡くなった人が何としてでも生きたかった一日を、今日僕たちは生きています。朝、目覚めることは最高の奇跡なんです。

最後に、一生懸命子育てしてるママさんたちへ。

家族がいるってこと、それはそれは素晴らしい奇跡だと僕は思います。子育ては「未来をつくる行為」です。最高のクリエイションであり、究極の創造です。だから、楽しんでください。

『星の時計の Liddell (リデル)』という漫画で「子どもは未来からの客人だ」というセリフがあります。自分が決して見ることができない未来社会で生きる未来人たちが、過去を学びにやってきた存在。それが子どもだと。

「だからいいおもてなしをしてやりたい。未来に帰って幸福なみやげ話ができるように」って。

本当にそうだなって。携帯電話が毎年進化するように、子どもたちはこの星の未来を見せてくれる先生です。そんな未来人たちに「幸福なみやげ話」を渡しましょう。